

広大無碍の一心

――入出二門の源泉――

安 田 理 深

広大無碍の一心、こういう言葉がある。「証卷」の一番最後の所に『浄土論』を解釈された『論註』の講釈を述べておられます。その中に「論主は広大無碍の一心を宣布して雑染堪忍の群生を開化したまへり」とこういつてありますね。それから、宗師は（曇鸞のことですが）、大悲往還の回向を顯示して他利利他の深義を弘宣したまへり。『教行信証』にこういうふうにいっとるですね。大悲往還の回向を顯示してねんごろに他利利他の深義を弘宣したまへりと。懇切に他利利他の深義を弘宣された。他利利他ということは、普通考えると、同じことじゃないかこう考えとるから、それでそこを慇懃に区別を明らかにしてくだされた。こんな具合に、その他にも色々あるけれどもですね、一番かなめな点ですね。あれもありこれもありと言っとらずに、一番重要な点を親鸞はこういう言葉で述べておる。

それでこのですね、広大無碍の一心という言葉を顯示された、そして雑染堪忍の群生を開化された、雑染堪忍の群生を開化された。なかなか人間というのは複雑なものでね、単純なことを領かんものと、こういう意味でしょうね。それを開化された。『浄土論』というもので天親菩薩は、大いに自分が雑染堪忍の群生を開化するというようなこと言っとる訳じゃないですけども、ただ自分はゆくりなくも本願に遇うてそこにこの一心をおこすことができる。起こしてみたらそれは広大無碍の一心だったと言う。自分の力で雑染堪忍の群生を開化するとかそんなような

ことを言つゝる訳じゃない。ただそこに出た、表明された、廣大難思の一心というものがですね、それ自身に雑染堪忍の群生を開化するんです。天親菩薩は色々なことで雑染堪忍の群生を開化するんじゃない。天親菩薩のおこされた一心がですね、それが雑染堪忍の群生を開化すると、何でも人を教化するっていうのはそんなもんです。教える人の言葉に人は教化されるもんじゃない。本当に教えをいただいた人の言葉に教化されるのでありましてね。一語で言え

ば、廣大無碍の一心とこういう。廣大無碍という言葉はですね、尽十方無碍ということが廣大無碍ということなんです。だからして、如来の徳であり、また浄土の徳なんですわね。如来の徳および浄土の徳を賜った天親菩薩の一心が廣大とこう考えられるんです。廣大なのはその如来が廣大だと。ところがそうだからといってですね、廣大の無碍の如来をですね、廣大でない狭小有碍の信心が信ずるということはない。ちょっと自信を持ちすぎたという具合に考えられるかも知らんけれどもですね、天親菩薩がいわれるのもっとも謙讓な言葉なんですわね。だからして、我一心と

いうのは、我が身が一心にという意味であって、そこには身という意味がある。

七高僧の中でも、我という字を使っておられるのは初めには天親菩薩、後には善導大師ですね。それから日本の源信僧都、この三人ですね。「大悲ものうきことなく常に我が身を照らしたまう」とこういう風うにいわれます。偈文の關係上「大悲無倦常照我」というけど、我身というのが本来の言葉だ。善導大師は自身といわれる。「自身はこれ現に罪惡生死の凡夫」とこういったんだね。こういう字はひとつ大事ですね。だからして、偉かったら広大難信のですね、いわゆる本願の徳がただけんです。人間が偉かったら広大難信の信心というものがただけない。これを反省して、我が身は大事なものとというような意味じゃなしに、反省というようなものもできないような深さをもっとるのが宿業なんです。どれだけ宿業があるかってことは、反省してもわからんです。わからんけど、やっぱりそこに、そういうような重さがあると、こういう意味を宿業という言葉で表す。どれだけあったら宿業になるかちゅうことはそうではない。測れば測るほど無限に多いと。無限に多いといっても無限に多いといふこ

とを言うのにですね、やっぱりその宿業を意味してる言葉で、言っても言っても言い足りない程の深さをもつとる。

「自身は現にこれ罪惡生死の凡夫」というのはただ反省したというような意味じゃないですね。反省した。善導大師の言葉を言えば、曠劫以来親を殺し子供を殺してきたとこういつておられる。そんな覚えがありますかね。親を殺し子を殺し、そういうような罪惡深重の身である。親を殺した覚えなんかない。賢い人間じゃないけれどもですね、それでも惡覚ではないと思つとる。そういうようなもんです。それは宿業というのに触れんからです。宿業というのは個人を責める言葉じゃない。個人を責めて宿業というんじゃないんだ。ここが色々と法を聞いておられる場合に、非常に誤りがおこる。機の深信ということを言いますが、非常に誤りがおこってくるんですね。宿業というのは、反省できないものという意味なんですね。その宿業の身っていうのは自分だけの身でなく、自分の身を通して一切衆生に關係を持つとる。こういう意味なんです。一切衆生に關係を持つとる。こういう意味なんです。やっぱり身が痛むとかね、そのようなことなんです。昔、曾我さんの所に遊びに行つたら「今日、大谷大学から帰りがけにあそこで電車を降りました。えらい混んどつてね電車が。切付を渡すのを忘れて降りちゃった。盗むつもりはないんだけど、渡すのを忘れた」と、えらい曾我さんは反省しておられたんだけど。そんなようなもんであつてですね。羊の毛、卵の毛程のというあれであつて、何でもなしのようなことなだけで重重無尽の宿業というものに、そういうことがおこるんであつてですね、簡単にちよつと過失であつてというような事では済まんです。責めとる言葉じゃない。そりゃどうにもならんもんだという意味です。どうにもならんもんですが宿業なんだ。思いの通りに行かんもんですが。したがってそこにですね、思いが破れるんです、宿業ってのは。そういうことが大事です。思いが破れる。宿業の身だと思ふんじゃない。色々の思いが破れる、思いが思いを知らされるんだ。そういうような事を皆さんはあまり普段から聞かれないかもしれませんが。

唯識という学問があつてですね、これは天親菩薩の教学で、唯識つてな事もそういう事を意味するんです。だから

自分の心といってもですね、ただ、今おこつてくるような心ってなものじゃない。そりゃ心つてのは間断なしに、おこつた瞬間に後から消えていくってなもんだけど、どこからおこつてどこへ消えて行くんかなとこう考えてみなきゃならん。旅の恥は掻捨という訳にはいかんでしょう。どっからやってきてどこへ消えていくのかっていうと、我々は我々の心をちよつと考えて、波のような、スーブに浮いた泡のように思うけどそうじゃない。大きな流れがある。私が死んでもその流れは消えんです。そういう深い反省ですね。宿業といつてあることは、瞬間におこつて消えるような心では宿業ってなものはわからんです。瞬間におこつて消えていくような心、その働きが業なんですけど、しかしその働きを失なわず種子しとるんやね。そういうものは普通の心じゃないです。だから我が身がとこう言つた時にですね、自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、その我が身ということを学問的に、天親菩薩が明らかにされてですね。それで阿頼耶識といわれるようになった。阿頼耶識というのは、これは身の心や、身を背負うた心という意味。だから話は面倒な話です。なかなか複雑な話ですけど、問題がある場所はそう遠いことじゃない。我が身は現にこれ罪惡生死の凡夫、そういうことがどうして成り立つかという、阿頼耶識がなければ成り立ちようがないという事です。

それで、眞実功德の名号ということですか、眞実功德っていうのはだいたいいつでも五功德門です。行は五念門という。因の五念門によって果の五功德門を得よと。こういうんですけど、因果って事がですね、因から果をおこして果の中に因を包んである。全部これは果を説いてあるんですね。そうすると果の世界で。光とか、淨土とかいうのはですね果の世界です。絢爛たるものが述べてあるのは果の世界を表す。因の世界じゃないですね。因がない訳じゃないけど、実はその形のない因を表わそうとして果の世界を表す。果の世界には形があるけど因の世界には形がないから、無限に深いというようなことを言ってみてもようわからんから、果の世界を通して因から果を生じてその果によって因というものを表す。だから絢爛たる光の世界の裏にはですね、やっぱり何といえますかね、悲しみて絶つすという悲絶の一つの求道心の歴史がある。

悲絶っていう意味ですが、あまりこんな所で耶蘇教の話、聞きたくないと思われるかも知らんけど、まあそう頑固な事言わずに聞いてみなさい。キリスト教の十字架っていうようなものに、感動せん心が本願に感動するはずがないと僕は思うんです。「なんじゃい、耶蘇教が」といった心が本願のおぼしめしに感動するちゅうことはありえないんです。たまたま坊さんに籍を置いとるから嫌いになった、それは坊主根性であってですね、別に宗教心じゃない。キリストの受難という事がありますね。詳しい事は色々ありますけども、キリスト教の意味というのはですね、ちよつと法蔵菩薩と似ているようだけど違うのは、法蔵菩薩を説かれた釈尊の教えというものに依っておるといふんじやなしにですね、キリスト教の場合はですね、出来事に依っとるんです。それで福音という。何か議論とかですね、キリストが悟った深い思想で皆が感化したというんではないんであって、キリストがキリストの身をもつて受けていったその苦難の歴史があるんですね。人間を考えるために。それであそこに受難の道というのがある。それまでは全部キリストの受難の為の物語であってですね、受難ということを書けるのがキリスト教のマタイ伝・ヨハネ伝の主眼だ。だからして、そういう一つの事件が起きたということを伝達するという意味が、事件を報告するという意味が福音。幸いなる音信という意味なんです。だからそこにね、一連の悲絶というものとあると思うんですけど、最後に十字架の判決を受ける。十字架っていうのはね、政治犯というものが受ける罰なんだ。盗人とか、そういうことじゃない。国家に謀反を起こしたと。近くは、そのエルサレムですね。僧侶階級に対して謀反を起こした。遠くはローマの僧侶に対して謀反を起こしたってな事になるんだ。だからそうじゃないんだけど、それを少しも弁明せんですね。弁明すれば十字架にかかる必要がない、弁明する必要があるけれどですね、弁明しようとしませんよ。そこらですね、言って逃がれるっていうような事ができんような絶対絶命の場所でしょうね。そういうもんです。法難でもね。法然上人の法難でも、親鸞聖人の法難でも弁明して通るようなもんじやない。もう向こうはすぐ待っとるんだから、犯罪者として処刑することをね。

キリストの受難の道というのがあります。ここでキリストは一番端の角をまがったとか、その次はまた第二の角に來たとか、その次はまた第三の角に來た、そこで母親のマリアが出遇った場所とかね。ここではキリストは悶絶して倒れてね、体力がなくなつた。若い田舎の青年がかわりに十字架を担いだとか、こんなような場所が、今でも克明に残されとるんですよ。それでそこへ行くまでにゲッセマネの園というのがありまして、ゲッセマネの園で弟子を連れてそこでキリストが祈る。一人になりたいというんです。群衆の中にこうまき込まれたんですな。ワッとなんかね、今の朝鮮のあの運動みたいなんでも、喧喧囂囂たる中に巻き込まれたんですから。一人になりたい、そんなものは弁明してみたところで通りゃせんのでしょうか。だから一人離れて祈りたいと。じゃお前ら目を覚ましとけ、と言ってキリストは祈る。で出てみると皆寝とる。そういうこと色々あるけどですね。詳しいんです、死に至るまでの過程がね。そして最後にはりつけの場所に行つて、十字架にかけられて息が絶えた、こういうんですけれど、その時にですね「我が神よ我が神、何ぞ我れを捨て給うや。願わくばこの苦杯、(苦しい杯)を取り去り給え」と、こういうのですね、しかし我が心を通そうというのではありません。「御心のままに」と。こう言つて息が絶えた。そして、静かに十字架を降ろされた。そこまで十字架に(キリストに)ついてきておつた弟子はね、一人もおらんだちゅうんや。ちりぢりばらばらに逃げちゃつた。まあそういうような事を一つ考えてみても、あれは悲絶ちゅうもんじゃないかね。本当に悲絶ちゅうような言葉がいえる。それだからしてあんなようなキリストの死というものは今日までね続いておるんですよ。キリスト教が今日まで人を動かすのは悲絶なんだ。悲絶が人を感動させるんだ。そういうことを思つて(キリスト教でなものは昔はなかったからわからんけど、そういう事を思つて)法蔵菩薩というものを考えてみることもできるんじゃないか。ところが、そうではなく、ただむちゃくちゃに嫌つとる訳ですね。インドとアラブとは世界が違いますからね。全然違うんで、違った世界から批評するって事は当らないですね。

悲絶とか、森厳とかね、森という字と厳しいちゅうこと、森厳なる世界とかつてね、そういうものが光の背後にあ

る。ただ光が光じゃない。その背後には、その森厳なる受難の世界つてものがあると思うんですね。それは隠されとるんだ。キリスト教の強みは教理じゃないから強みがあるんです。キリストが受難を受けたちゅうことは教理じゃないってこと。事件。神が人間となって人間を救った事件。それにみんなが救われているんですね。そこに強みがある。仏教が墮落するのは教理だからである。教理ということになるというとですね、墮落するんじゃない、消えてしまふんじゃないでしょうか。「行証久しく廃れ」といわれるんですから。教はあるけど、だれもそこに人がおらん、助かった人がおらん。そういうことになってですね、人がないところには何んにもないです。僧伽というようにことを言ってみてもですね、人がおらんところに何んにもないんです。

悲絶というようなことは、ちょっと解らんけど、近いところで言えばですね、清沢先生のことを考えてみるとね、あれが、やっぱり悲絶の生涯じゃないかね。一生ねえ、恥を忘れてですね、痰壺持って、やせ細って、こう話しておられた。だからその言葉にですね、侵すべからざる權威があった。つまり、感心させる話じゃないんですね。感心させる話というのは芸能ですわ。うまいこと話すとか、巧みとかいう酔わせるだけの話だわね。だからしてそういう話じゃ人は救われやせん。清沢先生には、そういうことはなかった。悲絶という御生涯でなかったか。だからですね、遠いことじゃない、清沢満之というものをもって考えるならば、やっぱりそこにですね、「ああ、法蔵菩薩の物語とというのはこれであったか」と、こういうことが清沢満之の生涯を通してわれわれは知らされる。話しじゃなかったんだなということがね。

これはまあ余談ですけどね。ものには、この、歴史ということが大事なんだ。ものが成るには、成る日に成るにあらずですね。成る日に成ったんじゃない。成ったものではですね、そこに非常に長い歴史を持つとる。こういうことが言えますね。だから我々の問題というのは、これからどうして助かるということばっかり心配してるんですけど、私はどうしてここに生まれて来とるんかということを考えない。それはあたりまえのことだという。自分が今この身に

置かれとることとは、何んでもないことだと思っんです。我が身は宿業の身だけでも、何んでもないというのが宿業ではない。非常に重い身をもっているけど、その重い身をもって本願に結びつけられている。本願といっても、なんか特別なことを言うんじゃない、宗教心に結びつけられとるんですね。宗教心の藏なんだ、受難なんだ。法蔵菩薩というのは、別に人が在ったというわけではない。そうですね。そうかと言って教理ではないですね。

僕は、どうもね、こう思われるんです。大乘仏教（今日我々がいうような大乘仏教）というものはね、小乗仏教の教理からはどうしても出てこやせん、何んぼ積み重ねてもね。これはやっぱりジャータカというもんじゃないか。物語りだ。ジャータカというもの、まあ言ってみりゃ、前世の物語りをジャータカという。だからして法蔵菩薩の本願を宿願というでしょ。宿願の宿というのは昔のこと。それは、我々の背景をあらわすんでしょ。正依の『無量寿経』にはないけども、異訳の『無量寿経』にはですね、阿闍世が来とるんですよ、『大無量寿経』の会座に。普通は、阿闍世の物語りは『涅槃経』なんです。あるいは、『観無量寿経』とか。『唯除五逆誹謗正法』ということとはね、あれも、僕は、教理じゃないと思います。やっぱり五逆と誹謗正法とは、あれは事実ですね。王舎城の悲劇、あの事件の。あの事件というものをもとにしてですね、五逆と誹謗正法ということは出たんじゃないかね、考えて教理としてあんなものを考えたんじゃないと思っんですね。やっぱり事件じゃないか。こういうふうと思っんです。

だから、なんちゅうかね、嘉号ちゅうかね、「円融至徳の嘉号」という字は、結果という意味じゃない。喜ばしいという意味です。名号は、因果を総合する概念です。南無の二字を主として考えれば、因。阿弥陀仏の四字を主として考えれば果。因果を総合しとる。「円融至徳の嘉号」というようなですね、「真実功德相」というようなことを言う場合には、果ですわね。因ではない。果を現わしている。これはどういう意味かというと、つまり夜が明けるぞというような意味であってですね、もう出来上がとるんだと、それを知らんのは自分だけだったという意味があるんじゃないかと。まあ普通考えるというときみんなうろろして、あっちこっちを見ても世の中は、おおいに流転しとると。

こういうふうには、慨嘆する人があるかもしれないけど、そうじゃない。だってですね、慨嘆せんならんのは自分だけだった。こういう意味があるんじゃないでしょうかね。人が解らんとこう思ってたが、そうじゃない。解らんのは自分だけだ。このような意味が、それがまあすでに、因の本願は果として成就しとると。すでにいうことが、非常に大きな意味があるんじゃないでしょうかね。あるいは「本有」ですね。あるいは「悉有」とか。「悉有仏性」。「本有」とか「悉有」とかいえば、みんなこれは自然にある、この道が。これから色々々がすんじやない。色々研究してやね、さがすんなら、そんなもん間に合わんがね。迷っとる人間の知恵をどれ程集めたって、そんなもんで道が見つかるはずはない。道ということがいえるのは本有だから。つくったもんじやないから道ということが言える。そういうふうには、やっぱり、果ということを主におく。という意味ですね。

『教行信証』に、『略文類』というのがありますが、『略文類』というのは、やっぱり果に因を略してあるんですね。因に果を略するということではないですね。果に因を略してある。こちらのほうでは、「帰命尽十方無碍光如来、南無不可思議光」と、こうありますけど、『略文類』の「念仏偈」の方ではね、「西方不可思議尊」と、こうある。簡単にね。「帰命」も「南無」もつけてない。それはですね、「南無」も「阿弥陀仏」もつけるとやね、両方とも対象化されるでしょ。帰命も南無も対象化されるでしょ。「西方不可思議尊」といったときには、自分の方が「帰命」におらんと言えんのですわね。自分が帰命におるから「西方不可思議尊」と言えるんであってね。帰命を向うに置いたんではね、なんにもなりません。「西方不可思議尊」。こう言ったときには、言っとる自分は、帰命しとる。「西方不可思議尊」の心に目ざめて、その目ざめた自分は、「西方不可思議尊」の中に撰取されとる。だからして、因に果を略するんじゃない。果に因を略すると。広く転開するという意味は、果から因を開くわけです。こういうような意味があるんだと思います。でまあ、その、「帰命尽十方無碍光如来」ということをやね、廣大無碍の一心だと、こう言うのは、なぜ言えるかというと、「帰命尽十方無碍光」ということが廣大なんだ。ええ。廣大の一心。廣大ということが、さ

つき言ったように、自心ということ破つとるんです。自心、自性唯心に沈むとかね、定散の自心に迷うとかね。自心というものを破つとる。これは「化身土巻」に、自利各別の心と言います。名号ってなものは、これ、同じ意味でしょ。だれにも、名号は同じ意味ですけど。しかし名号を信ずる心は、一人一人みんな違うと。年齢によっても違し、体験によっても違うしねえ。今日、始めて聞いた人の場合と、何十年来聞いて来た場合と、それは一々違うと。こういうのがまあ、常識なんですね。広大無碍ということは、そういうことを破つとるんですね。それでこの一心を他力回向の一心と言う。

『歎異抄』に「信心同一」ということがありますが、あれは何かちゅうとですね、信ぜられた教えが同一という意味じゃない。念仏往生ということは同じだと言つとるんじゃない。能信だ。普通じゃ自利各別と考えとる信が一つなんだ。ああゆうような事は、ちよつと普通じゃなかなか言えんことなんです。名号が同一ということは解るけども。時が来つて、時によつて機が熟してですね、そして信仰の学びを開く。信仰の学びを開くのは、つまり、衆生ですから、まあそれも無視するわけじゃないんですけどね、原則としては、法というものには違いがない。違いは機にある。だからして『観経』なんかの定散二善とかというのは、『観経』ではあれは、法だと考えとるんですね。だけど本当の法じゃないですよ。違うんだから。みなさん御承知のようにですね、「善導独明仏正意、矜哀定散与逆惡」とこう言つてあります。定散というのは善の機根ですね。逆は惡の機根。だから人間について言つてあるんですね。定散の機と逆惡の機を矜哀すると。そのように親鸞は読まれた。定散二善は、定散の法という意味じゃない。定散の機だと。法といつてるけど、やっぱり機の色を帯びとる。違うものは機にあると、こういう意味ですね。そういうことはやっぱりあるんだろうと思うんですね。

「行巻」にですね、「絶対不二の教」ということがある。念仏は「絶対不二の教」である、こういうふうですね。絶対というようなことは、あんまり普通使わんですね。「行巻」のしまいに出てくる程度である。あんまり絶対と

いうことは出とらんわね。あそこに「絶対不二の機」ということが出とる。だけどあそこにはね、「絶対不二の教」をあきらかにするのが主眼でね、「絶対不二の機」は、主眼じゃない。「絶対不二の教」というものをあきらかにするのが主眼。しかしそれがですね、絶対不二でないものが機ですけど、その機がですね、三願転入を通して絶対不二の教に帰ってきたんや。そういうことをあらわすんです。絶対不二の教というものに、信というものに帰って来た。始めから絶対不二の信ということは無い。やっぱり、衆生というものを忘れちゃいかんということですね。衆生というものは、宿業の身というところに衆生がある。そこを忘れてはいかんと。宿業の身という意味は、凡夫という意味なんです。ところが多くの凡夫はですね、凡夫だと思っとらんや。人間だと思っとる。凡夫だと思っとらん。なるべく凡夫から伸びようとしている。伸びようとしとるけど、それは知れたもんですがね。汽車の中におってですね、後の席から前の席の方へあせていっとるようなもんや。うつてみたところで大したことあらへん。そんなもんでしてね。それは、つまり汽車の箱を信用しとらんから。乗った汽車の箱と自分の足とが別々なんですわね。そういうのが疑いですね。乗っとっても疑いがある。乗ったら信じたというもんじゃないですね。乗ってもやっぱり疑いの心は離れん。だからして、容易でないということなんです。そういう意味でしょう。不可思議兆載永劫というようなことを言っているのは、あれは容易でないことを、あらわすんですよ。信じようと思えばいつでも信じれるというもんじゃない。けれども、なかなか安売りはせんぞというような意味じゃない。だから、もったいぶって言うてるんじゃないですけどもね。なかなか容易でないというのは、信を得た人が言うのであってですね、得ん人がそして言うんじゃない。得ん人が言うちゅうとですね、安売りはせんぞということになる。そういうことになるんですわね。得た人が言うんだ。かたじけないということを。有り難いということを。有る人が言うんです。有るのは有り難いことだと、こう言うんです。無いものが言うはずがない。希有というようなことですね。それは、なんでそういうことが言えるかというと、得てみたらそこに歴史があった。我々が得んまでもそこに包まれとったと。今日得た時に始め

て本願に遇うんじゃない。得て本願に遇うてみたら、得んまでも本願の中に在ったと。こういうことを知るんでしょ。それで、かたじけないということが言えるわけですわね。だから、まあ、この今言ったように、名号に依って信を建てるということがですね、つまり行に依って信を建てるということが、何故大事かと言うとですね、名号でも、真実功德というようなこと書いてあるのは、果ですわね。円融至徳の嘉号という、この号というのは、これは果の名前なんです。果の名前。因の名前は名。嘉号というのは因と言うより、因を果に略してある。それで嘉号と言うんですが、つまり、果の名号、本願成就の名号という意味です。それを通して、本願というものを聞く。その本願を聞くという時にはですね、そこに見い出すんですね。我が身を見い出します。人間というものは、ちょっと考えてみるということですね。罪惡深重の凡夫とかね、そのような凡人、悪だとかいうことをいうかもしれないけど、そうではないんですね。罪惡深重の凡夫というのは、本当の意味の悪というものはですね、そういうもんじゃなしに、「邪見憍慢惡衆生」というようにね、つまり言ってみれば心が悪なんだ。身が悪じゃない。そうしてみると心が悪という感じ。

「自身は現にこれ罪惡生死の凡夫」というのは、身ですね。身なら宿業の身だと。そりゃ暗いということじゃないんであってね、暗いのは心が暗い。例えてみたら、まあ地獄に落ちた人は明るいんだけど、落ちやせんかと思うとこに暗い。なんとか落ちんようにしようというところに暗い心がある。そうしますとさっきの自分を固執してですね、自分自身に固執する心ですね、これが暗くするのである。だからその、邪見憍慢をそのままにして、そのままのお助けだと言ってもですね、邪見憍慢をそのままにしてお助けということは無いです。罪惡深重というものは、信心をおこせば、罪惡深重の身がそのまま功德に転ずるんですけどね。けども、邪見憍慢はそのままということは無いんで、邪見憍慢が破られて、始めて転ずるんですね。邪見憍慢ということ、これはもう絶対的に破らなければならんもんである。それがある限り、夜は明けることはない。けれども、破ると言っても、破ろうと思って破れるわけじゃないわね。だからそういうところに、名号というものがあるんじゃないかな。名号というものがあってですね、肩たたくわけ

す。肩たたかれて、はっと帰るわけじゃないかね。自分が思索して、何か考えて帰るということは無いでしょうね。人間が考えるというとな、こうして考える。頭、俯くでしょ。もの考える時にね。それは謙譲でもなんでもないんであって、自分の心を捨てんのや。聞いたことを自分で練り直してやね、やっとなるからこうなる。だけど聞其名号ということはですね、聴聞と書いてあるわね。「名声十方に超えん」、これですね。やっぱり称名ということもあるけど聞名です。ね。称名ということは聞名のために称名がある。聞名のほうは、こりゃあ、言い直してみると聴聞です。ね。こりゃあやっぱり大事のためにですね、「行巻」を引いて見ますというのと、「名声十方に超えん。究竟して聞こゆることなくば、誓う、正覚を成らじ」とこう言っている。これはやっぱり親鸞はですね、十七願の願文に続いて、それを引いてある。これは重誓の偈ですわね。だからして十七願では、何かこの、あらわれない意義をあらわす。重ねて誓うがという意味はですね、もう一返り返すという意味じゃないですね、重大である点をあらわすということ。重ねるという意味もあるけれど、重ねるのは重大であるから重ねるのである。「本誓重願虚しからず」という言葉が善導にある。重願。重い願です。虚しからず、このときは、重い願ですわね。十七願というのは非常に大事な願だ。すべて、そこから始まるという意味です。それを取って、ただ成仏だ往生だといってみようもない。このために重願ということが言われているんですね。その名号をもって、信心というものを回向すると。名号に依って、名号を通して、名号の回向された本願に目覚める。それだからしてですね、つまり言ってみりゃあ、仏の因位の願心というものをいただくことだ。それが信心なんだ。仏の本願に、我々の信心を加えるんじゃない。それじゃあ、自利各別になっちゃう。本願に我々の心を加えてというんじゃない。そういうことののために人間迷うんですから。持ちかえんということ。すわね。持ちかえちゃいかん。本願を自分の方に持ちかえてはいけない。本願というものを持ちかえんということは、持ちかえる心は、自分の都合のいいように解釈する。だからまあ、あなたがたでもみんな話してみられるといいんですわ。これ、何か人間というものは、よう聞いたらへんのですわ。如是我聞ということがありますが、如是

に聞いとらんですわ。聞いとらんね。都合のええように聞いとる。如説修行、如是我聞、如是に聞くと。あるいは、如是を聞くと。あるいは如是に聞くと。聞いたことを如是に修行すると。こういうのは何かというと、頭でそうするんじゃない。感動なんでしょうね。感動することですわ。翻訳するんじゃない。それが宗教心というもんだ。宗教心というものは、宗教感覚というものが、これが大事なんであってですね。感覚のないものはどうしてみようもないですね。そりゃ解らんのやね。我々が色々と聞くとというのは、聞いたことを溜め込むんじゃないんですね、感覚を新たにすること。宗教感覚を新たにすることを聞法というわけです。

「光をおう人に光はなかりけり。光なき人光をあおぐ」これは、藤原鉄乗さんの歌でね。なんか得意なんかね。僕は、あんまり感心せんのやけど。理屈が入っとるんじゃないかね。理屈が入っとる歌みたいな感じがするね。だけど注意されるところはよく解かる。ここに今出とる問題はですね、別なことを書いてあるようだね、藤原さんの場合。

尽十方無碍光如来というのはですね、光が氾濫しとるか、こういうふうですね。それが、我が身に開かれる心、信心をいただくということですが、信心をいただくためには、信心を受け取る場所がないと困るんですね。どこで信心が開くかという場所がないと困る。それで我が身ということを言う。我が思いじゃない。思いで色々やってみても、思いに悩むんですね。思い煩う。まあ、それ無理もないことだと言えば、そういうことも言えるけどもね。それでやっぱりさっき言ったように、思い知らされる。そういうことが自力無効ということだ。始めはですね、自力には有効と無効とあるように思うとる。やれば有効になるんじゃないかと。始めから自力無効ということは無いと、こう思ってたんですね。やればそこにですね、自力無効ということが自力の本質なんだと。そうすりゃそれで、自力の思いが（自力の思いを自心と言う）自心が自心に破れる。自覚だわね。自力を捨てて他力をたのむというけど、自力を捨てて他力をたのむんだけど、自力というものを止めたらすね、他力をたのむことが出来ん。自力を捨ててちゅうんです。捨てるということに自覚がある。つまり自覚というのは、何かと言うと、他の事、如来を自覚するというよう

なことじゃない。自分を自覚する。自分で自分を自覚する。思いが思い自身を知ることや。その時、思いは破れる。努力してという意味じゃないですね。忌々しいけどというような意味じゃない。まったく妄想であったと破れる。それで、そういう時にですね、その、思いが破れて落ちるわけです。どこへ落ちると言って他人の所へ落ちるんやない。身に落ちる。そうでしょ。身に落ちたらそれより下はありません。宿業の身よりもっと下というものはない。そこに在るのは立ち上がるだけがある。人間というのは、倒れる所で立ち上がる。倒れる所が、そこで人間はまた立ち上がる。だからして、何もやらん人間というものはですね、自力で始めからやろうとせん。つまらんものだと知っとるから。やろうとせんというからして、自力無効の思いも知るはずないし、それからやってもですね。失敗したことの無い人はあかん。失敗したという経験のない人はだめだ。やれば必ず失敗する。失敗というものが、それが立ち上がる契機。だから始めから失敗を恐れとるなら、やらんに限る。始めから成功しとる。なんにもせんのは、これは成功しとる。だから、何かそこに、やっぱり失敗の経験というものが、大事だけれど、失敗の経験というものが何故大事だということの意味が解るのは、求道心があるから。求道心というものがあるからして、失敗も役立って来る。だから求道心のない人は、失敗してみたって、それでどうもこうもならんわ。つまり同情してみたところだね、同情が役立つもんでもないしね。また、同情ぐらいで人間は救われるもんでもない。それでこの宿業の身という所に落ちるとやね、そうするとそこに始めて、廣大難思という一つの、自分の心に心が破れるんであって、身に帰るというところ、その身というところに今度は、廣大難思の心が、そこに触れる場所なんです。法蔵菩薩というのもそういう意味です。法蔵菩薩というのはどういう意味かと言うと、偉い菩薩という意味じゃないんですわ。観音、勢至と言うようなですね、そういう菩薩ではない。まあそれもさっきの話になるけど、キリスト教の華々しい悲絶というものでもないかもしれない。

（本稿は、昭和五十年二月十八日、岐阜県慈光会主催の『入出二門偈』の会における講義の筆録を整理したものである。文責 編集部）